

年間第 14 主日

マタイ 11 : 25～30

2014.7.6 9 : 30 ミサ

柴田 潔(イエズス会司祭)

「疲れた者、重荷を負う者は、だれでも私のもとに来なさい。休ませてあげよう」。私が初めて教会に訪れた時に掲示されていたみ言葉です。聖書のみ言葉の中でもとても印象深い言葉です。このみ言葉が、私の荷をどのように軽くしてくれたのか、2つの体験から考えます。

皆さんはお気づきではないかもしれませんが、私は新しい眼鏡をしています。最近、英語のミサをしていてミサーレが良く見えない、つまり老眼が進んできたので、オーストラリアで困らないように遠近両用めがねを作りました。上石神井のある神父さんのメガネも壊れていたので一緒に吉祥寺のメガネ屋さんに行ってきました。その神父さんは、私がイエズス会の入会を希望した時の管区長さんで、私の入会を許可してくれた方です。けれども、数年前に病気で倒れてから記憶障害になってしまい、一人で外出できなくなってしまっています。そのため、私が一緒に行くことになりました。その神父さんは、入会の時にお世話になるもっと前にも、私に大切なことを言ってくれました。実は、私は、大学を卒業する時にも召出しを少し考えたことがあって、その神父さんに相談に行きました。すると、「どうして、司祭になりたいと思ったのですか？」と質問されました。私は正直に「人手が足りなさそうなので・・・」と答えました。すると「なり手がいないからじゃなくて、柴田さんが本当に幸せになれると思ったらまた考えてみてください」と言ってくれました。残念ながら、この話をして「そんなこと言ったかな？」ともう神父さんは覚えてはおられないのですが、私にはとても意味のある言葉でした。なぜなら、もしあのまま大学を卒業してすぐにイエズス会に入っていたら、続かなかったと思うからです。「人手が足りないから」という理由では、何年も持たない。やっぱり、自分が満たされていく道だと信じないと長続きはしないでしょう。もし人手不足をカバーしようと思っていたら、あるいは周りから期待されて司祭の道を歩み始めたら、きっと途中でつぶれてしまっていた。その神父さんは、若い私に余計な重荷を背負わないように、荷を軽くするためにアドバイスをくれたと感謝しています。

もう一つ、私の荷を軽くしてくれた話をご紹介します。神学部の大学院の入試の面接の時の話です。試験官の中のある神父さんは、私の願書を見ながらこう切り出しました。「柴田さんは、若く見えるけど、もうこんな年なんだね。よく若い人に交じって頑張ってきたね。あと2年大変だろうけど頑張ってください」。私はその時45歳。他の受験者の倍の年をとっていました。神父さんは、私が年齢と闘いながら勉強しなくてはならないことがわかっていました。それ以来、キリスト論を教える先生として尊敬しています。「くびきを負いやすくする」というのは、こういうことなんだ、と学びました。

「疲れた者、重荷を負う者は、だれでも私のもとに来なさい。休ませてあげよう」。初めて教会に行った時にこのみ言葉に出会ってから、約30年経ちました。今では遠近両用めがねを使うようになりましたが、振り返ってみて大切だと感じるのは、み言葉を心に刻んで、神さまに信頼して委ねることです。大事なことは相談する、不安でも一歩踏み出してみる。そうするうちに、必要な助けがあつて荷が軽くなっていく。神さまに守られて、導かれていく。私たちの人生は、そうなるようにあらかじめ決まっているように思えてきます。今は、英語の勉強に苦勞していますが、オーストラリアでも荷を軽くしてくれる助けがあるでしょう。皆さんの生活にも、荷を軽くしてくれる、休ませてくれる体験があるはずです。その恵みを願ってミサを続けます。